

私大環協ニュース

私立大学環境保全協議会
第79号 2025.12

Environmental Protection Association of Private Universities NEWS



夏期研修研究会 会場
(同志社大学 今出川校地)



同志社創立150周年記念
The Doshisha 第38回夏期研修研究会

8月28日（木）

1. 13:00～13:10 開会挨拶
2. 13:10～13:20 開催校挨拶
3. 13:20～14:10 特別講演
「希望を挙げ ラーニングガーデンと学生の自然観」
同志社大学社会学部教育文化学科准教授
ビリー・スティーブンソン
4. 14:30～15:20 研修講演
「持続可能な地域づくりの視点からの資源化技術」
同志社大学理工学部環境システム学科教授 赤尾 駿史
5. 15:40～17:10 グループ討議
6. 17:30～19:00 情報交換会

8月29日（金）

1. 9:30～11:00 グループ討議
◇ 移動（20分） ◇
2. 11:20～12:10 講演
「京ならではの地域脱炭素モデルの構築」
京都市環境政策局地球温暖化対策脱炭素地域創出促進部長
川崎 明浩
3. 12:10～12:20 講演総括
4. 12:30～13:30 キャンパス見学会

オンライン参加にあたり、文字通訳、場内説明、座席の確保等について、特別な配慮をご希望の方は、申込時にご希望の内容をお知らせください。

グループ討議テーマ

I : 教育と連携
「地域と大学の連携、協働による地域のソーシャル・イノベーション」
地域と大学、学生の連携、協働による、SDGs実現ための地域のソーシャル・イノベーションについて、同志社大学の中島恵理教授のご研究や実践例をもとに、討議します。

II : 化学物質
「新たな化学物質規制体制系に向けた対応について」
前回までのグループ討議を取り上げた、化学物質規制体制系の見直しについて、新たな情報等をもとに、6つのグループに分かれ、テーマに応じた意見交換などを行うことを予定しています。

III : 施設・設備
「再生可能エネルギー100%キャンバス実現に向けた課題と解決策」
再生エネルギー100%キャンバスの実現に向けた課題とその解決策を、先進事例の紹介、実務者視点での討議、参加者同士の意見交換を通じて深掘りします。

オンライン申込は
<https://shidaikankyo.jp>



講演会場の様子



グループ討議会場の様子

CONTENTS

環境ニュース	2
会員校紹介 ● 大阪電気通信大学	4
会員校紹介 ● 神戸薬科大学	5
賛助会員紹介 ● 岩谷マテリアル株式会社	6
賛助会員紹介 ● アサヒ衛陶株式会社	7
コラム、事務局だより	8

星薬科大学 薬学部 薬学教育研究部門 山崎正博 教授 インタビュー



裁くより、救いたい——。 “推し”から始まった研究者への道

漫画、アニメ、映画——どんな物語にも個性豊かなキャラクターが登場し、“推しの人”もまた人それぞれです。星薬科大学薬学部薬学教育研究部門の山崎正博教授にとっての“推し”は、ロボットアニメに登場する研究者でした。山崎教授はこう懐古します。

「主人公やヒーローに憧れたことはほとんどありませんでした。それよりも、『マジンガーZ』の弓弦之助教授や、『宇宙戦艦ヤマト』の真田志郎のように、どんな難題でも解決策を見出す頭脳明晰さ、冷静な分析力といった“知恵や技術で周囲を支える科学者”に格好良さを感じていました。自動車関連企業で研究職だった父から研究の面白さを教わったこともあって、子どもの頃から研究が身近だったのも大きかったです」

研究者に憧れを抱く一方で、数学が苦手だったため、高校一年生までは裁判官を志していました。

「歴史が好きで歴史小説を好んで読んでいた流れで、国家形成に不可欠な法律や社会正義にも興味がありました。でも、裁判記録を読んだり、犯罪関連の書籍を調べたりするうちに、“裁く”仕事では本当の意味で人を救えないのでは、と葛藤が生まれたんです。そこで“人を救う×研究”という視点から医学や薬学を考えました。ただ、幼少期に血管注射で辛い目に遭ったことがトラウマになってしまって……大人になってからチアノーゼで倒れたことがあるほど先端恐怖症が酷い。ラットへの注射を助手に頼むほど、今でも注射は全然ダメなんです。だから医学は難しいと思いました。その一方、薬学なら科学と医学が融合していて、薬を通してより多くの人の役に立てる。そこに魅力を感じ、薬学に進むことを決断しました」

こうした背景から山崎教授は、1992年に京都大学薬学部に入学します。当時から一般企業への就職は考えず、研究者一筋だったと言います。

「親には『大学には9年通う』と宣言して入学しましたし、教授にも『アカデミックに残ることを前提とした研究テーマ

をください』とお願いしました。そしたら『5年かけていいから、新しい技術を発見してこい』と、壮大なテーマを投げられました(笑)。日夜、DNAの精製やPCR（ポリメラーゼ連鎖反応）、電気泳動を繰り返し、他学部や他大学に新しいバイオ技術を習いにも行きました。こうした地道な積み重ねが性に合っていたんでしょうね。運よく修士1年目に『FGF10』という新しい細胞増殖因子を発見でき、研究者としての道が開けていきました」

ただ、独り立ちを実感したのは、2000年に星薬科大学に着任して数年後のことだったそうです。

「大学院時代は、遺伝子配列が特許になるか議論されていた頃で、新技術の発見はスピード勝負。先に発表した人が勝ちの世界だったから、教授が論文の骨子を作り、僕は穴を埋める形で書いていました。結局、原型が残らないくらい書き直されていたから、僕の論文とは恥ずかしくて言えませんでした。だから、星薬科大学で助手2年目だったかな、初めて1から書いた論文が学術雑誌に掲載されたのは。“ようやく独り立ちできた”と、とても感慨深かったです」

“人を裁くより人を救う”。地道に丁寧に——。その信念に支えられ、山崎教授はいまこの瞬間も研究に向き合っています。



銀杏並木から望む星薬大

生活習慣病の予防へ ケトン体代謝に潜む“脂肪のスイッチ”を探して！

FGF10の発見後も脂肪細胞の研究を続けた山崎教授。星薬科大学の衛生化学教室に籍を移してからは、肥満・生活習慣病に関する予防衛生学的研究を進めます。

「脂肪細胞には、脂肪を溜めこむ白色脂肪、燃焼して熱に変える褐色脂肪、その中間のベージュ細胞があり、人によつてこれらの割合は大きく異なります。肥満になりにくい人は

ベージュや褐色脂肪の割合が高く、逆に太りやすく生活習慣病になりやすい人は、白色脂肪に偏る傾向があります。また人は、ブドウ糖が不足すると脂肪を燃やしてエネルギーを生み出します。このときに脂肪酸から生成され作られる副産物がケトン体です。ケトン体は非常時にはエネルギー源になりますが、過剰に生成されると糖尿病の合併症などの重篤な疾病に繋がります。私の研究では、脂肪組織を研究の舞台に、ケトン体を脂肪に戻す経路のメカニズム解明に取り組んでいます

そして、一度生成されたケトン体を脂肪に戻すスイッチになる酵素がアセトアセチル-CoA合成酵素です。

「この酵素が、白色脂肪では増えて褐色脂肪では減る。つまり、アセトアセチル-CoA合成酵素が“脂肪細胞の性質を決める鍵”として働いている可能性があります。仮に、この経路のメカニズムが解明されて循環システムを構築することができれば、ケトン体から褐色脂肪やベージュ細胞に変わりやすくする新しいアプローチの開発に繋がります。そうなれば、生活習慣病の早期発見、肥満を予防する薬の創薬、代謝アップを促す栄養戦略まで、幅広い予防医学への応用が期待できます」

また、衛生化学の立場から臭素系難燃剤の研究にも5年ほど前から取り組んでいます。

「臭素系難燃剤は、プラスチックや繊維などの素材を燃えにくくする化学物質です。私が研究するテトラブロモビスフェノールA（TBBPA）は、主に電子機器の基板やプラスチック製品、そしてカーテンなどの繊維製品に用いられています。不燃物扱いなので、樹脂片から空気中に化学物質が拡散したり、不法投棄されたプラスチックごみやマイクロプラスチックから添加剤が溶出したりすることもあります」

TBBPAは毒性が低いとされるものの、欧州では母乳から微量が検出された例もあり、有害性評価が改めて進められています。

「TBBPAを細胞に与えると、ケトン体を脂質に戻す“スイッチ役”であるアセトアセチル-CoA合成酵素の発現量が上がります。肝臓毒性や遺伝毒性は報告されていませんが、ケトン体から脂質に変換される際の脂肪細胞の性質に影響を与える可能性はあります。仮にそうだとすると、環境要因が人の体質形成に影響するかもしれない。環境化学と脂質代謝という離れた分野をつなぐことで、新しい予防医学のヒントが見つかるかもしれないということで研究を進めています」

山崎教授は、脂質代謝と環境化学という異分野の架橋を通じて、生活習慣病予防の新たな視点を拓こうとしているのです。

正解のない世界で生き抜く これからの薬剤師に必要な力とは

山崎教授が薬学教育研究部門の教授に就任して2年が経ちますが、これまで以上に人材育成にも力を注いでいます。その理由をこう話します。

「近年、研究志向の学生は減り、臨床を志す学生が増えています。しかし、薬剤師が飽和しつつあり、“処方をこなすだけ”では生き残るのは厳しい。必要なのは、患者一人ひとりに向き合い、課題を見発して解決策を提案できる薬剤師です。講義やゼミでは、期待通りの実験データが得られなくても、失敗と決めつけるのではなく、まず“このデータや結果が何を意味するのか”を学生自身に考えてもらいます。仮説の修正や実験の方向転換を促し、正解のない世界へ踏み出せる力を育てたいと考えています」

さらに同部門では、教育研究も進めています。

「6年間に及ぶ、学習方法と成績の伸びの追跡調査では、まとめノートの作成や暗記中心の学習法は成績向上に大きく寄与せず、むしろ複数分野を関連付けて理解を図る学生ほど成績が伸びることがわかっています。今後は、こうしたエビデンスを参考に、教育の質そのものを高めていきたいですね」

学生の主体性を引き出すための距離感にも、山崎教授は気を配ります。

「今の学生は教授との距離が近い世代です。だからこそ指示を出すときは必ず理由を説明し、納得してもらいます。学生が話しかけやすい関係性が生まれれば、彼らは自然と“次はこうしたい”と自分の考えを持ち始めます。また、教育研究部門は、基礎科学・臨床薬学・教育研究の3つの分野をまたぐため、まとまりにくい面もあります。今年の学園祭でコーヒー店を出店したように、一体感を育む活動にも積極的に取り組んでいきたいですね」



薬学教育研究部門

山崎教授の視線は、弦之助教授や真田志郎のように、常に学生の未来に向けられています。

編集後記

平日は家族全員が食卓を囲むのが難しいため、週末は家族そろって食事を楽しむ山崎教授。中学三年生の息子さんの勉強を見て、家の掃除を済ませたら料理の手伝いが始まります。最近はパーティー料理が多く、チーズフォンデュ用のチーズを溶かし続けたり、肉まんの皮を仕込んだりと、気づけば“コツコツ作業担当”が定位置に。「ガンプラが唯一の趣味です。昔は“息子のため”という言い訳で複数買ましたが、今ではそれも通用しません」と笑いながらも、免罪符が効かなくなつた現状に少し寂しそうな表情を見せます。

大阪電気通信大学



学園創立80周年事業として寝屋川キャンパスをリニューアル

目立つ大学より役立つ大学

大阪電気通信大学は、1941年に電子工学と通信工学を基盤とする電気通信技術の学校として創立されました。1951年に高等学校、1961年に大学を設立し、現在では工学・情報・建築・医療・スポーツ・ゲームなど幅広い分野を展開する、文理融合型の総合大学として発展しています。

創立以来、「実学」を重視した教育を行い、「目立つ大学より役立つ大学」という考えのもと、社会で活躍できる人材の育成に取り組んでいます。

持続可能なキャンパスづくり

持続可能な社会の実現に貢献するため、エネルギー削減およびCO₂排出削減に積極的に取り組んでいます。寝屋川キャンパスでは、2011年に開設した工学部環境学科(現・基礎理工学科環境化学専攻)に合わせて「エコラボ」を設置。屋上には出力20kWの太陽光発電設備を備え、エコラボや実験センターへ電力を供給しています。

また、全キャンパスで照明のLED化を進め、デマンド監視装置を導入。電力使用量が一定の基準を超えた場合には一部の空調設備を制御するなど、エネルギー管理の最適化を実践しています。これらの取り組みを通じて、学生・教職員が日常的に環境意識を高め、持続可能な社会の構築に向けた学びと実践を両立させています。



2022年に完成した寝屋川キャンパス
「OECU イノベーションスクエア」

多様性への配慮と 誰もが学びやすい環境づくり

本学では多様な背景を持つすべての学生が安心して学べる環境づくりを重視しています。2016年度以降、学生の要望を受けてトイレの改修工事を段階的に実施。2022年の寝屋川キャンパスリニューアルでは、車いす対応やオストメイト対応のトイレを設置し、キャンパス全体のバリアフリー化を推進しました。女子トイレには生理用品の無償配布機を設置し、生理の貧困問題にも対応しています。

授業棟には原則としてエレベーターを設置し、固定机の教室にも車いすで受講できるスペースを確保。すべての学生が平等に学びの機会を得られるよう、細部にわたって環境整備を進めています。

学びと社会をつなぐキャンパスへ

学園創立80周年を機に、2022年には寝屋川キャンパスをリニューアルし、「OECU イノベーションスクエア」を開設しました。この新棟は、学び・研究・交流を融合した空間として、持続可能で多様な社会を支える次世代の人材育成拠点となっています。

また、障がいを持つ方の生活を支援する電動車いすの開発など、社会課題の解決に直結する研究活動にも積極的に取り組んでおり、国際大会「Cybathlon」では世界3位を獲得するなど、研究の成果が国内外で高く評価されています。



©2024 ETH Zurich / Cybathlon / Nicola Pitaro

大阪電気通信大学は、環境への意識と多様性への理解を教育・研究・施設運営のすべてに取り入れ、持続可能で包摂的な大学づくりを進めています。これからも、社会とともに学び続ける大学として、地域と未来に貢献していきます。

神戸薬科大学



神戸市が一望できるキャンパス

学校紹介

神戸薬科大学は、1932年に神戸女子薬学専門学校として設立認可を受けて以来、90年以上にわたって優れた薬剤師、研究者、専門職能人を社会に送り出してきました。

これからも明日の医療を担う実力のある薬剤師、社会で活躍できる実践力を身につけた薬のスペシャリストの養成を目指します。

薬学の「知の集積」。縁あふれる歴史あるキャンパス

豊かな自然に囲まれた山の手の閑静な住宅街、兵庫県神戸市東灘区の山すそに学舎を構えています。充実した学びを実現するにふさわしい環境の下、高度な研究・教育施設が整っています。

「学びと未来をつなぐ場所」新教育棟の開設

2024年4月に教育棟「A棟」を竣工。

新教育棟開設により、学生教育のためにICTを活用し、新しい教育環境及び交流の場を構築しました。

神薬リビング



新教育棟の中心に配した「神薬リビング」が様々なものをつなぎ、学生のキャンパスライフに活気とくつろぎを与えます。

2層吹き抜けとなっており、

それに面した大講義室、多目的室、実習室、自習室、学生支援センター、レンタルラボはスケルトンで配置されており、アクセスしやすい空間を創り出しています。

また、「神薬リビング」には、デジタルコンテンツや書籍が配架されているほか、イベントを開催することも可能であり、本学の情報発信の中心となっています。

環境との調和

新教育棟の建設に伴い、伐採せざるを得なかつた2・3号館の間に自生していた樹木を製材・乾燥させ、造作材として再利用することで、敷地内の資源を有効活用し、廃棄物を削減しました。

神薬リビングのカウンターをはじめ、手に触れるところにこれらの木材を使用することで、木の温もりのある空間を創出し、この地の記憶を新教育棟へと継承します。

みんなで創る

新教育棟の設計コンセプトのひとつ、「みんなで創る」を具現化するために、学生や教職員が参加するワークショップを開催しました。グループワークを通じて、大講義室や自習室、パウダールームのインテリアについて、ディスカッションやプレゼンテーションを行い、それらを設計やデザインに反映させてきました。



ワークショップの様子

キャンパス計画

キャンパス整備計画もいよいよ最終段階に入り、2025年度に1号館の解体を完了し、その跡地を学生たちの憩いの場として神薬ガーデンを整地するのみとなりました。

2026年度春にオープンとなる神薬ガーデン(芝生広場)の完成をもって、2014年度に策定したキャンパス整備計画は完成を迎えることになります。



イメージ

賛助会員紹介

岩谷マテリアル株式会社(Iwatani Materials Corporation)

岩谷マテリアルは、イワタニグループの企業理念でもある「世の中に必要なものこそ栄える」を基本にマテリアル事業の中核会社のひとつとしてオリジナリティ溢れる商品を通じて世の中に必要とされるクリエイティブな企業を目指します。

合成樹脂事業

お客様のニーズに密着した高付加価値製品を高い技術力で提供します。



- 農業用マルチフィルム
- 建築用フィルム資材
- 合成樹脂原料
- 樹脂成形品

ホームプロダクツ事業

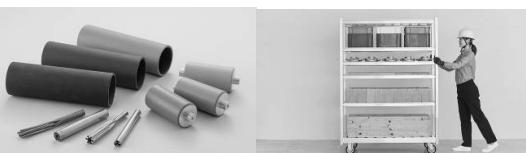
住まいと暮らしに必要な”モノ”を提供しています。



- アーラップ、アーラップ関連製品
- ブロー成形品
- グルラボ
- インテリア製品

金属製品事業

お客様の悩みに素材と技術と知識で応えます。



- 空調室外機カバー
- 各種金属加工品
- 花き物流台車
- アルミ製軽量棚台車

アグリ資材事業

土づくりから出荷まで日本の農業・園芸を支えていきます。



- ピートモス
- サブストシステム
- 苗生産設備
- 種苗・切花

私立大学環境保全協議会の皆様

大学関係者様に向けて実験系廃液専用容器を開発致しました。
繰り返し安全にご使用頂ける容器です。ご相談お待ちしております。



Web



岩谷マテリアル HP

YouTube



岩谷マテリアル 公式

Instagram



アーラップ



グルラボ



アイムディー

X (旧Twitter)



アーラップ



グルラボ



アイムディー



農業資材

アサヒ衛陶株式会社



【本社】



【ピッコラシリーズ】

ユニットバスの省スペース性と、バス・トイレの快適性をひとつに。0.67坪のコンパクト空間に、従来のカーテンに代わる「折れ戸」で仕切られた独立バス＆トイレを実現。床はいつでもカラッと清潔で、心地よさが長く続きます。



【香川工場】

会社概要・沿革

アサヒ衛陶株式会社の起源は、丹司家の家業として約300年前、江戸時代の享保年間（1716年～1736年）にさかのぼります。当時、摂津国大領村（現在の大阪市住吉区）において屋根瓦（いぶし瓦）の製造販売を始めたことがその創業の始まりです。



海の守護神として有名な住吉大社の東1kmの地で、初代・庄衛門が「摂州瓦屋庄兵衛」と称していぶし瓦を製造し、宮瓦納入の功によって住吉大社から「丹司」の姓を授かりました。

屋根瓦の製造では、一般住宅のみならず全国の神社仏閣にも数多く納め、「宮瓦（みやがわら）」の用達として住吉大社にも奉納するなど、高い技術と信頼を積み重ねてまいりました。その後、時代の変化とともに「土と水を扱う技術」を継承し、1935年（昭和10年）の大坂衛陶工場完成により衛生陶器の製造を開始。さらに1950年（昭和25年）には「丹司製陶株式会社」を設立し、衛生陶器事業を会社組織として本格的に展開しました。以来70年以上にわたり、住宅・公共施設・商業建築など、幅広い分野で衛生設備製品の開発・供給を続けています。

現在では、「ヒトのこと、水のこと、未来のことを考える」という理念のもと、節水型トイレや洗面台などの開発を進めています。また、高齢者・障がい者向けの人にもやさしい衛生空間づくりや、雨水利用など環境に配慮した製品づくりにも力を注いでいます。

 **アサヒ衛陶株式会社**

〒540-0028
大阪府大阪市中央区常盤町1丁目3-8
中央大通FNビル10階
TEL:090-9163-8933
MAIL:k-tanji@asahieito.co.jp

<https://www.asahieito.co.jp/>
アサヒ衛陶Webサイトへ
QRコードで簡単アクセス →



雨水利用への取り組みの背景

① 社会的背景

近年の気候変動・豪雨災害・渇水により、建築設備業界でも水資源の分散利用の必要性が高まっている。

② アサヒ衛陶の立場

アサヒ衛陶は、衛生設備メーカーとしての知見と環境配慮型製品開発の経験を活かして、雨水利用の検討を開始。

雨水を「再利用可能な地域資源」として位置づけ、日常利用だけでなく災害時の備えとしても活用を検討。

③ 活用対象・具体例

都市型建築物（商業施設・教育施設・工場）の導入を想定
日常利用：

- ・雨水トイレ洗浄利用
- ・緑化用散水、冷却散水

災害時利用：

- ・RO浄水器を用いた飲用、生活用水の確保
- ・緊急時の水道代替としての活用



私たちは、日常の水資源の有効活用と、災害時の安全な水確保の両立を目指し、衛生設備メーカーとして、安心で快適な水まわり環境づくりに取り組んでいます。

コラム

地域づくりとひとづくり

「地球温暖化対策推進法」の制定(2021年3月)を受けて、2050年にCO₂排出を実質ゼロにする「ゼロカーボンシティ」を目指すことを表明する自治体が増えている。2025年6月時点で、ゼロカーボンシティを宣言した自治体数は1182(46都道府県、655市、22特別区、398町、61村)に及ぶ。さらに環境省が策定した「地域脱炭素ロードマップ」(2021年6月)によれば、2020年から2025年まで(!)集中的に政策を総動員し、少なくとも100カ所の「脱炭素先行地域」(2025年5月時点では、40都道府県117市町村の88自治体)を選定する。そして2030年から、全国で多くの「脱炭素ドミノ」を起こし、2050年には脱炭素で、かつ持続可能で強靭な活力ある地域社会を実現するとされる。

しかしながら、管見によれば、こうした「脱炭素社会」の実現に向けて課題となるのは、こうした(もっと一般的に言えば)「持続可能な社会」を創造する担い手となる人材をいかに育成するかということである。どれだけ国や自治体が法律を制定し政策を策定しても、市民や企業、コミュニティなどのステークホルダーが「カーボンニュートラル」を自らの課題として受け止め、その課題の解決に向けて、連携・連帯して取り組むことがなければ、目標を達成することは難しいであろう。

そのため私のゼミでは、数年来、大学が自治体や地域社会と連携しながら、持続可能な地域づくりとその担い手となるひとづくりをめざす「プロジェクト型アクティブラーニング」を展開している。

ゼミのポリシーは「SDGsの視点から地域社会の未来を創造する」。具体的には、新宿区をフィールドに、区民、区内企業、NPOなどと連携し、①地域の環境イベントに出演する、②イベントの企画や運営に携わる、③市民向けフォーラムを主催する、④地域課題解決型ワークショップを実施する、⑤WEBやSNSを使って活動内容を発信する。これらを通じて、学生たちはコミュニケーション力とプレゼンテーション力、さらには環境マインドと課題発見・解決能力を養い、卒業後も持続可能な未来を創造することに主体的に貢献できる人材の育成を目指す。環境問題を身近な対象(地域の課題)として捉え、様々な主体との連携(マルチステークホルダー・パートナーシップ)を軸に、課題の解決につなげていく「Think globally, act locally」の思想を大切にしたいと考えている。

私立大学環境保全協議会 顧問 飛田 满
(目白大学教授 社会学部長)

事務局だより

第42回 総会・研修研究会 ご案内

【会 場】日本工業大学 埼玉キャンパス
〒345-8501 埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4-1
TEL:0480-34-4111(代表番号)
0480-33-7486(NIT-EMS本部)

【プログラム概要】

[第1日] 2026年3月12日(木)
<総会> 13:00~13:30
<研修研究会> 13:30~17:20
(情報交換会 17:30~19:00)

1. 開会挨拶
2. 開催校挨拶
3. 特別講演 「(仮題)ドローンを活用したスマート農業」
日本工業大学 基幹工学部 電気情報工学科教授 平栗 健史
4. 研修講演 日本工業大学 共通教育学群教授 佐藤 杉弥・
学生環境推進委員会メンバー

日本工業大学や同学生環境推進委員会における取り組みを紹介いたします

5. グループ討議
※ I ~ III グループから一つ選択してご参加ください。

I : 教育と連携

「SDGs 実現のための地域と大学との協働と連携

—日本工業大学の事例—

日本工業大学における SDGs 実現とそのための環境保全や、学生による地域連携活動についてご紹介いただき、大学・学生・地域の連携のあり方について議論します。

II : 化学物質

「昨今の化学物質規制体系に向けた対応について」
前回までのグループ討議で取り上げた、化学物質規制体系の見直しについて、新たな情報をもとに、複数のグループに分かれて、テーマに応じた意見交換を行うことを予定しています。また、大学での取組み事例紹介の企画や演習等も検討しています。

III : 施設・設備

「議論はキャンパスをどう変えたか? 各大学における施設計画・環境改善の具体例とその効果」

過去のグループ討議の議論から実現に至った施設計画・環境改善事例をご提供いただき、その効果を検証するとともに、次なる展開について議論を深めます。また、文部科学省担当者による講演も予定しています。

6. 情報交換会(立食)

[第2日] 2026年3月13日(金)

<研修研究会> 9:30~12:30
(キャンパス見学会 12:40~13:40)

1. グループ討議 ※前日より引き続き討議を行います。
2. 講演(仮題) 「埼玉県の環境教育と行政の関りについて」

埼玉県環境部環境政策課 企画調整・環境影響評価担当
技師 豊田 りさ子

3. 閉会挨拶
4. キャンパス見学会

* * * * *

講演会は、対面開催および後日録画配信のみとなり、ライブ配信は行いませんので、ご了承ください。

詳細は、別途メールにてご案内差し上げる開催案内をご参照ください。プログラムは変更となる可能性がありますので、最新の情報を協議会ホームページにてご確認ください。

私大環協ニュース

第79号 2025年12月発行

発行・編集
 私立大学環境保全協議会
Environmental Protection Association of Private Universities

〒169-8555

東京都新宿区大久保3-4-1 早稲田大学環境保全センター内

TEL 03-5273-9605

印刷 (株)研恒社



P-K10002



FSC® C016129



第39回夏期研修研究会(2026年8月予定)は関西大学にて開催を予定しております。